

資料紹介

凡 例

- 一、基本的に、問題点を付して翻訳してある。
- 一、意味がわかりやすいように、濁点・半濁点を付してある。
- 一、原本に濁点等がある場合は、(ママ)の記号を付した。
- 一、文章部分の改行は、必ずしも原本通りではない。
- 一、漢字は、現行のものに改めるようにした。

こまづか集

書誌

「底本」京大学類原文庫本。「書型」半紙本。「冊数」一冊。
「表紙」灰生成。雷文繫ぎに菊唐草模様。「題簽」原装刷題簽、中央、無辺「こまづか集」。「匡郭」なし。「柱刻」「序一（一二）」、「一（二二八）」。「丁数」全三十一丁。「行数」每半葉八行。「序」半化坊闌更。「跋」重厚。「刊記」皇都寺町通二條／蕉門書林 橘屋治兵衛梓。「備考」ところどころに朱書による訂正が施してある（訂正者不明）。九丁表、鳩鳥↓旭鳥。十二丁表、宗副↓家副。十三丁裏、春の月↓春の夜は。なお表紙裏と最終丁の刊記の部分に後人の悪戯書があるも省略。

解題

等々力山万福寺の三車上人の発起により、芭蕉の「行く駒の麦に慰むやどり哉」の句碑を建立した折の記念集。内容は、芭蕉句を発句とした連句、首尾一卷。さらには馬蹄石（駒塚）に因む可都里の「駒づかや世にとゞろきの影高し」を発句とした歌仙一卷。さらには諸家の発句を掲げ、古今の俳人の詠んだ駒の句も掲げる。本書における、五味

可都里一派の協力は注目に値する。

等々力山万福寺は、山梨県勝沼町等々力にある浄土真宗本願寺派の寺。本書は、『甲州文庫史料』第八卷「甲斐俳諧編」（山梨県立図書館、昭55）に紹介されている。しかし残念ながら、恣意的本文の選択に加えて、杜撰な考証が試みられているので、今回改めて報告することにした。『甲州文庫史料』が採択する山梨県立図書館蔵の本は、小沢柳涯の手になる任意の写本で全十六丁。京大学類原文庫本は、版本で全三十一丁。この丁数の違いが、甲州文庫本の質の程度を象徴している。さらには、本書に刊年の記載がないところから、寛政十年頃成との類推もなされているが、これまた当を得ないものであった。以上のことから、再度考証を加えることにする。

『甲州文庫史料』の解説では、本書の成立を寛政十年頃というが、その根拠は序文を記した「半化坊闌更」が、「老懶おもき眼をひらき、十が一をここに塗抹するのみ」と述べていることを根拠として、その没年である寛政十年に近い頃を想定したまでのことである。しかし、それは闌更の

文飾にすぎないわけで、刊年の推定には適さない。それよりも、本書を出版した蕉門書林・橘屋治兵衛の『蕉門俳書目録』（京大学酒竹文庫蔵）の情報の方が、本書の刊年推定にはまだしも適している。「駒塚集 一冊」は、其水編「一茶百話」・「其角七部集」、蝶夢編「名所小鏡」と連続して記されている。其水編「一茶百話」は玄武坊の折々の俳諧談話を、酒田の俳人・其水が出版したもので天明七年（一七八七）刊。『其角七部集』には、天明七年版・天明八年版がある。そして、『名所小鏡』の寛政七年（古典文庫『俳諧名所小鏡』解説より）へと移行している。これらの並びを考慮すれば、天明八年以降寛政七年の間と想像せざるをえない。

『こまづか集』の出版が天明末年以降であったとするなら、よほど出版に至る経緯は理解しやすくなる。先に本書の内容を概観したごとく、闌更の序と重厚の跋をそなえ、かつ甲斐俳人・可都里一派の協力のもとに、本書は成立している。しかるに、池原鍊昌紹介の五味可都里の交流圏を測定するに便利な『名録帳』（『俳文芸』33・34）を検索しても、「三車上人」の名前は確認できない。とすると、可都里一派の協力を仰いでいるが、そこに仲介者の存在を想

定するのが、常識的であろう。かく考えて目をこらすとき、跋文を記した「重厚」の存在が気になる。あまりにも詳細な句碑成立の状況が、そこには紹介されているからである。闌更の序文が美文にすぎることに対して、重厚の文章は必要なことを過不足なく報じている。しばらく、その文章についてみよう。

ひく駒も御法のかひに駒とめてをしへゆるがぬとゞろきの石。中院内府公よませ給ふ甲斐国轟の里なる杉御坊の馬蹄石に因縁をむすび、ゆく駒の麦になぐさむやどり哉といふ、芭蕉翁の発句を石にものして「駒塚」とは名づく。その趣を願主・三車上人、都に登る折から我義仲寺に告て、かの諸国翁塚集のしりへにするせよときこへ侍る。

ここに文飾はほとんどない。「ひく駒も」云々の歌は、中院通茂公の歌として萩原元克編『甲斐名勝志』にも引用せられている。通茂公の家集『老槐和歌集』の写本若干を繙いてみたが、該当の歌を確認するには至っていない。この情報は甲斐の住人を通して入手したとしか考えられない。さらに「杉御坊の馬蹄石」や「駒塚」に関する指摘も具体的にすぎる。とすると重厚の甲州旅行が問題になってくるの

ではないか。

井上重厚は、竹内千代子の「井上重厚年譜稿」(関西大学「国文学」69号、平成4)によると、天明八年三月二十日に杉御坊こと万福寺を訪問している。それから流浪の年を重ねて、義仲寺に腰を落ち着けるのは、寛政四年三月のことである。それ以前にも若干義仲寺にいた形跡もあるが、三車上人と再び邂逅する機会は、寛政四年三月以降であったと想像せざるをえない。とすると当面、『こまづか集』は、寛政四年以降成立としておいた方がよい。

基本的に三車上人は、俳諧における人脈のない人のようである。重厚の尽力なくしては、これほど多様な俳人の入集など演出できるものではない。以上のことを考慮に入れて、『こまづか集』編集のシナリオを組み立ててみる。三車上人から俳書出版の相談を受けてから、重厚は甲斐において、知人の五味可都里に協力を求め、おのれの人脈を駆使して東北地方の俳人まで入集せしめるのである。ちなみに『こまづか集』には「南都 平角」らが入集している。この入集は寛政二・三年の重厚との交流なくしては了解できるものではなからう。とすると三車編とはいえ、実際は重厚の企画による一著であったと理解しておいた方がよい。

次に重厚が協力を求めた五味可都里であるが、『名録帳』に三車の名前が見えないのはいかにも解せない。くだんの『名録帳』は、寛政四年十月十九日の記事がもつとも下ったものである。よって、『名録帳』はおおよそ寛政四年成と考えておいてよい。とすると三車上人の『こまづか集』編集の企画は、寛政五年に集中したものと想像することができ。そのために筆まめな可都里も、『名録帳』に三車上人の名を録しえなかったのである。よって本解題では、『こまづか集』成立は寛政五年(一七九三)と仮定しておく。

ここまで推理してみると、さらに多様な世界が見えてくる。すなわち寛政五年は芭蕉百回忌にあたり、全国的に芭蕉顕彰運動が吹き荒れた時代である。その動向のなか、本書は出版されたのである。要するに、『こまづか集』の出版は、三車上人の杉御坊宣伝の思惑と重厚の芭蕉顕彰の思いとが、交錯したところにあったに違いない。

そのかみばせをの翁、甲斐が根に杖をめぐらし、たきつ魚の水とけそめしより、春色日にかさなり月にうつりつゝ、行駒の麦にたはるゝ露の間のやどりことさら旅の哀ふかく、暫時百景の(序一才) 霧時雨は故人と、もに腸をそゝぎ、山里の雪の仮の宿に、兎の皮の髭つくれと童子をも慰め給ひけるよし、風流さまぐゝなる中に、等力山万福精舎の五勝、世に名ぐはしく、馬蹄馬(序一ウ) 玉のよりどころなきにしもあらず。されば、かの高詠を碑にとゞめ、千載不朽の正風をあふぎ、遠近の好士の句々をもとめて、駒墳集を遺む事を告る。三車主人の趣意をふくみて、老懶おもき眼をひらき、(序二才) 十が一をここに塗抹するのみ。

半化坊闍更

(序二ウ)

駒墳集

ばせを翁

右一順(一ウ)

行駒の麦に慰むやどり哉
四方みどりなる卯月野の末
腹中の書をさらすべき人ありて
松戸の鈴のひとりさやゝ
既望のひまに兎は逃にけり
奉公さびしき冷めしの秋
蟬壳の柱にのこる下屋鋪^ツ
稻荷鎮めし宮の旧日記
うき恋や笠だにあらぬ雨の脚
しるしの石の帯しまりなき
いつしかに巨燵さめたる夜半の鐘
窓の透間を餅花の月

三車
闍更
漢甫
作良
田鶴村(一才)
著三
露岱
三潮
呉月
鬼夕
枝月

駒墳落成の日
駒つかや世にとろろきの影高し
道は奥ある苔のしたゝり
風かをる旅の餌ぶくる紐ときて
赤松どのゝ京入の月
黄葉ゝの錦をかざる夕かな
案山子をひとつ作る智慧なき
いたづらに埃のたまる古烏帽子^ツ
いはれをとへば女泣出す
津の国の名にはいやしき恋種や

可都里
作良
白亭
田鶴村
漢甫
五芳(二才)
鏡平
不求
柴馬

浦のみるめを拾ふ玉の緒
鴨の脚みじかき程に年くれて
鶴の毛ころも我にかせかし
戯て王母が桃をぬすむ日に
人の花には秋風もなし
糞虫も寄居虫も露の家もちて
雨のどかなる国のすみぐ
朝の月三味線草のゆかしくも
垣根ひとへを出代て行
譚訪ものゝ生ぐさ箸を腰にさし
軍奉行に不審うけたり
夕ぐれにまたうちわたる狐川
蜚かわれか我かほたる歌
夢に来て誘ひし人の名もしれず
ゆり起せどもうつぶしの神子
青柳に梅咲せたる風情して
かげろふ太刀を投捨にけり
春雨の凡夫を責る善光寺
ひらり／＼と棟上の餅
きのふまで宿せし月の萩刈て
秋の胡蝶の水に流るゝ
露霜のふたり消たき約束に

里 良 亭 村 甫 芳 平 里 良 亭 村 甫 芳 平 里 芳 甫 亭 良 里 平 芳 里 平 (二ウ)

連れぬ中の粟を搗なり
唄にうたふ間の土山暮かゝり
道心坊が雨気煩らふ
くだる世の姿を花になぐさめむ
風はひろくる万福の春
くさぐさ
猿人の来まさは啼ぬ夜の維子
花ぬすむ心の人や賤ならじ
燕や雨後の西日の岸伝ひ
河骨や浅きに咲て猶つよき
古塚に旅をしのぶや苔の花
山ざくら小鹿の角も折にけり
鶯の今朝こえ来しかみじか山
手折来る菊は白かれ夜の興
降ぞめは月の後欽村しぐれ
戸もたてぬ君に対して雨の鹿
秋たつや鳩の雛鳥水はなれ
鴨河や月夜つゞきて時鳥
夕萩や馬狂はせにつからせに
桜が三日となりて我身しる
うぐひすに舟よせかねし竹の岸

良 甫 村 三車 芳(四ウ) 芳著三 露岱 兜夕 孤山 巴登 如杉(四ウ) 澤南 作良 不求 柴馬 鏡平 田鶴村 眞洞 六珈(五ウ) 左岳

ほとゝぎす我呉竹にこゝろあれ
障子させば水鶏の声の曇り晁
野も山も南へひろき雪解哉
芹うりや都の春に立まじり
春雨や駕に乗ゆく歌枕
草はなに秋の心はなくも哉
諏訪口を吹れ来にけり暮の雁
子規うしろめたくも待夜かな
わが思ふ山にも人の月見かな
折かれてしばし悔る牡丹かな
年わすれ門田に鶴の下しより
枕ふく風あやなくも梅かをる
うちなびく馬場の柳に更衣
摘あらず草もまばらや不破の関
駒にひかれ心のまゝやけふの月
夜桜にこの川ひとつ関屋哉
時鳥まつ身になりて山寒し
ゆふ蟬やつかれし声と思れず
山吹に水くむ僧の長居かな
わが手より放すがごとし子規
涼しさにわざと牛ひく野川哉
汐汲の浪見て立りけさの秋

松声 雄生 南丸 柳冠 政尼 得魚 静菅(五ウ) 都良雄 眞貫 静良 梅五 和石 美敬 芦船 芦陽(六ウ) 梅人 百六 柳五 硯水 裏山 百哺 幸久

涼しさの限りを月の入さかな
闇出て萩見れば灯のうつりかな
涼しさや臥て海山おもひ居る
山越て花の裏見るとまり哉
白菊に月の有たき寢覚かな
萩のはな庵にそへて求けり
一なだれ雲を見る日の暑かな
ちるは／＼嵐の中の桜人
既望や舟たてる火の薄明り
夕桜めづる最中を人崩れ
から／＼とかはきし庭もけさの秋
内外につかぬ心やけさのあき
衝啼やうつゝ心の浮しづみ
朔日の月かけ見たし杜若
ちいさいは女の業か雪丸げ
梅柳さすがにおぼろ月夜哉
目のおよぶたけを桜の曇り哉
名月や更で取たる宿もよき
、
駒塚や隙ゆく春の野は秣
時鳥ある夜あき家の上を啼
我こゝろあかつきを恋の杜若

山鳥語(六ウ) 紫羅 恒洞 交雪 買山 童枝 垂水 白隣(七ウ) 鱒魚 有匪 王心 唐笑 雨秋 遠之元 台展(七ウ) 孤山 敵水 枝月 金英

紅梅にふきはかりけり春の風
切干の筵引ずれ梅の月

塵をだにすへし今宵の月の前
菜の花の水にも匂ふ真昼哉
秋のくれしづかに蟬のあゆみかな
朝霞とくるか松に日の光
しぐるゝや片はげ山の鐘の声
猫の恋瓦落してわかれけり
春雨の風情つくせり薄月夜
人まれに月のゆかしき枯野哉
騒がぬや夜舟になれし淀の雁
春の日の風は花のうき世哉
きのふまでの思ひは浅し花盛
秋のくれ見とるゝ蟻の行方哉
もぎどうに梅をる人の心にくし
夜しぐれや静あまりて寝つかれず
暑き日や干瓢しろき石の上
西二日とはぬ垣穂の木芽哉
臘々夕山こゆる紙火縄
親あらば帰るべき夜ぞ冬の月

、阿蔵
、斗入

(八才)

放才
俗呂
鬼友
交石
寄梅
桂如
栗巨(八ウ)
牧父
方舟
何鳥
枳丸
所一
春路
鳩鳥
三我(九才)
梅夜
白亭

ちらくゝと見しかとぞ思ふ杜宇
水鳥を見てみかへれば枯尾はな
是からは夏野なりけり松二本
山寺にふとん買なり時鳥
雲の峯地みち一鞍のる間あれ
磯浪の遠きにつみし苔菜かな
白雪の天気なりけり信濃やま
ちる桃にしばらく墓のといき哉
蓑笠をかくしおほせてけふの月
梅に月だまつて居てもよき夜也
棧やまはれば花に日の關る
売残る市にしほるゝつゝ哉
秋の暮きけば胡弓の園にひゞく
梅の露霜のとけたるものならず
刀さす僧に逢けり冬の山
ほとゝぎす二声それと定けり
秋海棠たなばた草と云まほし
ふたつなき月と更級の郡かな
春の風とすまして人は寝入りけり
冬の雨ほのかに潮ぐもり哉
かげろふや果は渚の夕付日
稲づまや雲なき夜の山の形

出成美
みち彦
泰昌
巢兆
宗讃(九ウ)
葛三
貞松
菊明
五芳
長翠
一馬
みつ
李明(十才)
双鳥
凉化
星布
五明
冥々
一草
英里
彦津良(十ウ)
草羅

ちる花や鮎や筏や芳野川
秋風は牧の笛さへあはれ也
埴土の上をすみけり春の水
東山に一日くれて春の月
萩梅の名も口をしや闇の門

津和宜応
下も戸樹
上も笑魚
鷺白
春鴻

甘井(十一才)

下戸ならぬ男来にけり雪の朝
明ぼのや水を見に出る春の風
虫がりや鳥羽で捨たる奈良うちは
山賤やあふさ来るさのほとゝぎす
罌さしと道かへてげり根芹摘
帷子やうこげば動く釣簾の陰
尋常に涕うちかみぬ負角力
わか草やあらしは風はるは春
春の水こゝも桜のわたし哉
家根石に鶺鴒なきぬ春のあめ
うき草や春かり初の水の月
冬庵あしたの雀夕がらす
奥山をいつか出て居て時鳥
元日の雨のうはさやけさの秋
岸草の蛩をうつす扇かな
水仙やわが怠りのおくれ咲

竹茂
素琴
桃路
祖明
柳莊
路人
文兆
希言(十一ウ)
猿左
如毛
雲帯
素壁
自徳
文輔
文嘯

宇津の山を過る

夕ばれや余所目になりし門柳
七草の残りあつめて鱸かな
並居たる人の真にやけふの月
鶯にうしろ合や橋大工
落る日の尾花にくるふ野末哉
つくくゝと昼の月見る落葉哉
落葉きく夜や夢に入花紅葉
かざしゆく扇のうへや筆の月
松にくれし日は桜より白みけり
我おもふひとつなりけりけふの月
さし置や二尺の梅に宵の月
蔓や雪消すほどの朝の雨
あらはるゝ日と成にけりほとゝぎす
涼風の闇にもあらぬこゝち哉
夏の月人の命とながめけり
春の水不性さうにも流れり
春の雲わざと明さる気しき哉
柴の戸や寝て居る顔へ桜ちる
己が背のやゝ隠れけり麦麴
涼しきや灯台引て朝の月

宗副(十二才)
柯則
江月
眉山
雲台
去留
伯先
鸛岡
一之(十二ウ)
蕉雨
壺伯
蘭二
青阿
無曲
帯川
霰打
峰水(十三才)
不止
宗巴
竜石

若葉から淋しき鳶の山路哉
春の月心のあるまればかりなり
飛のいて何驚の片こゝろ
酒米を取はやしたるすゞめかな
蛸多きみちや仏の足の跡
刺ばた蠅の飛ある天窓哉
草餅の家ごとにかはる青みかな
物おとの心だよりぞ秋たつ夜
名月やのぼらぬ霧の浦つたふ
野鼠の水わたるや朝あらし
湖の水もこぼさぬ月夜かな
雨の日や燕おとる奈良の町
村中や鼯みちきる木槿垣
此春もねはんを過し命かな
川おとの風に洩来て籠まくら
松茸にそへて贈るや火打石
寝こゝろの水にひかれて秋近し
明やすき夜にも先だつ嵐かな

養老の滝にて

月やむかし雲のうへなる滝の音
星合や下界をへだつ松の風

蘿道

羅城

臥央(十二ウ)

木朶

桐茂

龜淵

亜溪

しう

文行

如毛

一陽(十四ウ)

徒遊

此得

蔵六

乍及

馬涯

駄道

ひと雨に秋たつ宿の安き哉

友人の交りかはる四月哉

我にふる雨か無心の雲とはな

つまづきし石に音あり鳴のたつ

ひとつ葉の風ひやくと動けり

しらげしや秋を悲しむ人の庭

閑古鳥松の落葉の音もなし

松明の曇りて過尾花哉

山ぞひの家路曇りて鳴水鶏

秋あつし寝筵ふるく成まゝに

はしり舟亡の不二や松の富士

山ぶきに連翹ならぶ静なり

かつら草おくりくらし火ふり哉

七日よりさらりと春も月夜かな

青柳や大かた伸て竹の奥

くらがりへ牛牽入て夜の雪

こちら向て鳴おもかげや月の鹿

衣がへ青葉の柳さくらかな

初あらし一つの山は雨をまつ

しら雪やたてるけふりは人のため

雪やめは隴なりけり初月夜

真向の山も朝寝や春の雨

塘里

芹溪

千預

雨橋

班鳩

菊二

婦文(十五ウ)

馬仏

車大

鹿古

松井

眉山

替臥

北雅

沂山(十五ウ)

蛸秋

白尾

無諍

馬吹

魏道

跨山

髭風

淋しさに垣へ出て摘五加木哉

妻なしや明ぬから啼岨の鹿

菊隠(十六ウ)
鷺橋

古声

何笠

梨陰

李朝(十七ウ)

妙見山にて

杉千里下に世界の月今よひ

苅残す小田の高さよ九月尽

ほとゝぎす息もつきあへぬ遠音かな

綿入にわかれ心の日より哉

飛ぼたる笛の上手に追れ鬼

木まもりの橘おとす野分哉

雁すぐる横のうら山霞けり

行としや桂を下す松に竹

風そよく物こそいはね闇の梅

ゝ

くるゝ日の友なし雁よ春の雪

おふとりやみどりに匂ふ小松山

六月の鶯きゝぬ水のおく

雪の跡すみきる年の名残哉

堀池の法師おこさん夏の月

かれ水にぬれ羽からすや里の秋

したゝかに散日もさすが八重桜

雨の萩思ひしつみてねぶりけり

木姿

魚潜

あふひ

方外

尺艾

旧国(十六ウ)

升六

八千坊

二柳

玉屑

布舟

后菊

富雪(十七ウ)

路高

青岐

文里

李山

鐘いつこ雪よりおこる夕あらし

半日は山をはなれずほとゝぎす

暁やつかれて鵜縄ものにまどふ

夜あらしの滝にうつらふ照射哉

時鳥ある夜は雲のうき寝鳥

ほとゝぎす鳴やうきたつ明の雲

藻の花にちるや小舟の鯛のすみ

湯けぶりの軒しつまりて冬の月

鳶を中にふせやのけぶりかな

吹ふりや弱みも見せず年くるゝ

鳶や人なつかしき雨になく

からく東風こそわたれ土竜留メ

朝夕や花にはづれて人見ゆる

花ひと木咲ふくれたり西の岸

浪かすむ初や松に夜の月

枯々て芋にさかれけり葛かつら

秋の暮訪ひ来る人もむかしぶり

名月やよし野の法師海を恋ふ

あれしきに夜べの思ひや軒の霜

咲みちてわくら葉もなしけふの菊

鳴鳩女人堂までひゞき鳧

住吉や海と松とに秋の音

古声

何笠

梨陰

李朝(十七ウ)

花曉

花休

羅風

青人

依兮

蝶醉

此原(十八ウ)

裏梅

可角

夏夕

菊男

杜由

蝸茗

青容

箕深(十八ウ)

飲露

龜令

橋こゆる我などがめそ浮寝鳥
衣がへ花にきぬたも聞ざりし
木啄の木うら尽して立にけり
暮行や花によごれし木槿蓑
追はぎの衣戻しけり萩の原
ひやゝかや深草の里の朝けぶり
山こゝろはなれて啼かほとゝぎす

洛にありて

妓王寺の鐘にも近し冬籠
胸やすき時をねむるや昼の鶯
二曲り三曲りまがり山涼し
木がらしの吹かはかせし田づら哉

角田川に春ををしむ

行春の水にすがりて真乳山
窓の梅寝る時までは月もなし
白きもの澄のぼりてや天の河
かはほりや鬼の住たる古ばしら
どつぷりと暮て声あり春の山
春の雨毒たち破る日なりけり
田水ひく松の火きえて啼水鶏

大虫

綺石

閑叟

平角

其黒

素郷(十九才)

鉄船

北花

麦二

五什

花巢

春蟻(十九ウ)

虎杖

石蘭

是月

柳也

白鶴

槐主

夜や更ぬ町たてよこに飛蜚

しめひらく扇のうへや郭公

君が代や野をゆづりつゝ、若菜摘

こもり江や草にしづまる鶴の声

里の翁の昔がたりやほとゝぎす

見る所踏むところみな花野かな

借家にけふ来た人が小夜ぎぬた

城山やひと声秋のゆふがらす

明ぼのや雪の洲崎の鳥くもる

町すぢや月と灯籠の二あかり

人の日や何所もおどらず草の粥

電灯籠無言の僧の影清し

ぶしつけに哀を見せつ蝸牛

墓原や春を死たる人多し

門守の物よむ声やけさの春

咲はなと人ばかりなりひがし山

酒こぼすすみれに蝶のうつゝ、哉

合歡のはな網引の綱ぞ打こゆる

暑き日や松見つけたる山のかげ

涼風をほめて並ぶやしらぬ同士

花もどり門ひらかせて人もあり

酔ざめやさくら散来る岩まくら

盧中

蛸洲(二十才)

春当

玻井

吾柳

離比

可友

九草

車南

宇宙(二十ウ)

蔵模

文盛

古光

田禾

東籬

千阿

鉄ト

黛(二十才)

李湫

日文

蒼梧

眠人

雪の日や寒の友のたづね来る

夜すがらや只秋の雲秋の月

琵琶きくや荒たる宿に萩と月

起あがる臥猪の面の落葉かな

豎よこに寝て暑き夜の夜明哉

みをつくし鵜にかげろふを見る日哉

我ことし梅に都へ出たりけり

うかゝと老むさばらじ冬こもり

冬こもり唐まで心ゆく夜哉

初月に三井の山鳥夜や啼ん

梅が香を三つにたゝむや駕ふとん

孟を雪に埋んでわらひけり

枯原や伊吹の裏をはしる雲

白魚に牛の刀をかくしけり

登る日の柳をくゝるゆるみ哉

ほとゝぎすひと夜を越て啼もどる

水に鶯野やまの後のにしき哉

きて見れば是も春の紙衣かな

藤くふて一里を戻る夜みち哉

藤の実に日の流るゝや時あかり

只秋のひやりと梨の風味かな

蛙なくかぎりいつこそ夜の道

空色の裾ぬらしけり川涼み

燕の青きになれて芝築地

ある夜また蘭の花くふ鼠かな

折ちがふ声に夜明の鴨を見る

むつまじき膝に懸けり菊の露

菅の芽に田井の伯母訪ふ春辺哉

寝まどふて念仏申や引板の音

梅檀のこずゑ風ありはるの月

ふきのとう淵明菊に替つらん

名月や壁によこたふ権のかげ

埋火やなき安来たる夢の中

水におち野に飛つひに帰る雁

しら菊や香は中々にさわがしき

先にひとつすゝみがましや夕千どり

春風や所は日枝の小松原

星清し夕雲はみな露となり

雨の虫月恋しとか昼もなく

古戦場

芒かれて夜も鬼の火のみだれけり

其成

子良

芦涯

自来

無遊(二十三才)

且令

寸米

真越

古帆

方壺

虚白

芝峰

子坤(二十三ウ)

月居

定雅

丈左

都雀

白黛

瓜坊

關更(二十四才)

古人今人駒の

発句をひらふ

野を横に馬引むけよほとゝぎす
乗戀の蒲団くらべや鹿島立
口とりの烏帽子ながしぬ春の水
桜がり馬つなぎたる人は誰
若芝に尾をふかれけり神の駒
有がたや競馬に勝て夜が寝よき
桃尻の蒲団あぶなしつゝ馬
我国や馬ありながら雪車に乗
軽尻にくさめしてけり小六月
露寒く馬ひく木曾の谷間哉
馬の子の踊出けり夕ぎぬた
二三町馬すゝめゆく清水哉
雪の日や馬もひとつはほしきもの
牧駒の十まりかける野分哉
あふむけに興ある雪の落馬哉
殿ばらの駒うち入ぬ夏の河
迎ふたる駒の嘶ぶや朝あらし
馬の尾にみだるゝ蝶のふたつかな
馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり
すみ水に影さす鞭や駒むかへ

冬がれや軒の玉水馬の香
柳かげ馬のり捨て若菜哉
大和路や花によけれし小荷駄馬
馬市や小判ならぶる雪のうへ
引出す馬の跡より春の風
馬士の酒代むさぶる春辺かな
寒月や腸しぼる馬士のうた
小原女の馬に投たる棕かな
うつくしき重ふみけり馬の足
馬の耳すばめて寒し梨の花
草の野や白馬ひきゆく五月ばれ
夕日さす馬の灸場や蔓珠沙花
道の辺の木樞は馬に喰れけり
鞍つばに小坊主のるや大根引
蹄たてゝ十薬にほふ夕かな
夏川や馬つなぎおくみをつくし
献上の御馬ひきけり露はらひ
神むかへ水口だちか馬の鈴
雪とげや四谷の馬の尾をしばく
白牡丹秘蔵の馬に替てけり
夏の雲ふもとは不二か駒が嶽
夜通しに貢の馬や横田川

翁
三車
千影
春坂
夜来
有慶(二十四)
其角
平角
白雄
許六
方広
春峰
蝶夢
五来(二十五)
尚白
ふき
都雀
春花
翁
原水

馬買て遠く帰るや秋の里
うまにまで物云ふてけり年男
乗かけの角力に逢ぬ宇津の山
夕だちや川追上るはだか馬
我軒の田をすく馬の嘶び哉
千観が馬かる花の往来かな
野分して馬もしどろに川渡る
馬わたす船さし入ぬかれ尾花
馬洗ふ夜寒の里や角行灯
乗かけのはねあふ馬や弥生尽
馬喰の十銭おごる霜夜哉
馬をさへながむる雪の且かな
癖のある馬おもしろし春の暮
朝馬の鼻並べけり青あらし
乗ながら馬に水かふ月見かな
木がらしや横をり伏る甲斐の駒
雪の山蹄のあとを枝をりかな
馬ぼくく我を絵に見る枯野哉
馬だらひに寒菊にほふ夕餉哉
足がらの山ひき登れ雪の駒
牽馬や外桜田はうめの花
馬かりて竹田の里やゆく時雨

士朗
夢大(二十五)
旧国
凉児
丈草
呂路
無極
騏道
瓦全
支考(二十六)
北花
翁
蕪村
丈左
去来
重厚
花泉
翁(二十六)
太溪
斑鳩
宗讀
乙州

杜陵
雛花
買山
馬瓢(二十七)
南昌
正秀
蚊山
芹溪
きく
支考
菊二
百杵(二十七)
翁
全
蘭之
蘭更
雨橋
珍碩
嵐雪
晚白(二十八)
可能
一陽

撫られて馬飛するや花すゝき
初しぐれ人まち顔や神の馬
春風や借馬ひき行加茂堤
初雪や餅に化たる馬の糞
歩ならば杖つき坂を落馬哉

跋

ひく駒も御法のかひに跡とめてをしへゆるがぬとゞろきの石。中
院内府公よませ給ふ、甲斐国轟の里なる杉御坊の馬蹄石に因縁を
むすび、ゆく駒の麦になぐさむやどり哉といふ、芭蕉翁の発句を
石にものして駒塚とは名づく。その趣を願主・三車上人都に登る
折から、我義仲寺に告てかの諸国翁塚集のしりへにしろせよとき
こへ侍る。

蕉門書林 皇都寺町通二條
橋屋治兵衛梓

重厚

「氷面鏡九十四人集」

書誌

〔書型〕半紙本。〔冊数〕一冊。〔表紙〕藍鼠色。〔題簽〕中央無辺。
〔序題〕自序。〔匡郭〕なし。〔丁付〕序一、三、二、一、四十七終。
〔丁数〕全五十丁。〔行数〕序は半丁九行。跋は始め半丁九行、
他八行。〔序〕沈蛙窟運水〔印〕。〔跋〕知苦齋／東都／志塚／
〔印〕。〔刊記〕文化六巳仲秋。

解題

本書は、芭蕉が田原の滝で詠んだとされる「勢ひあり垂水
きえては滝津魚」〔現在、存疑句〕にちなみ、編集された一書。
巻頭に芭蕉、巻末に敲氷の句と姿絵を載せる。基本的に「白
滝のほとりなる郷」〔跋文〕に住む九十二人の句と姿絵とを掲
げて、芭蕉の「みづぐきの跡の徳」〔序文〕を慕わんとする趣向

にたつたものである。巻末の敲氷の句は「愛さるゝ白菊に似
よ我白髪」。編者・運水は敲氷門下の俳人で、その交流の実態
は清水茂夫稿「上矢敲氷伝」〔信州豊南短期大学紀要21〕5
に明らかである。敲氷の「愛さるゝ」の句は、天明八年（一七八
八）に「菊を見て感あり」の前書のもと、詠まれたものである。
折しも、敲氷五十七歳。なお、敲氷は享和三年（一八〇三）に
他界するので、本「氷面鏡九十四人集」は、敲氷の没後に上梓
されたことになる。運水・敲氷の交流については、先引の「上
矢敲氷伝」から関係事項を列挙してみると、よくわかる。天明
七年（一七八五）の九月二十六日・十月十日に文通、天明九年
（寛政元年）三月十八日・六月二十四日に敲氷宅を訪問。いず
れも句作指導を求めていることであつた。よつて敲氷を本集末
尾に据えるのは、当然のことといえる。

氷面鏡九十四人集 全

自序 〔印〕

時津風條をならさず、潤ふ雨も塊を
そこなはず、豊なる御代にあひては、
安飽のひとくさも文の道に心を
いるゝの浅からぬより、わがばせをの
翁、そのかみ此地に杖を曳て、しら
滝の絶勝をのこされしよりこのかた、
俳諧てふものゝ日にしげく月々に
さかえぬ事とぞなりにけれ。このころ
心おなじき三三子、竹のこみち分来
つゝ、祖翁曰滝眺望の画像を
うや／＼しうたづさへ、予にいえらく、千
里の遠きも一咫にあらはれ、もゝとせの
古へも今に伝て、掌を見るが如きは
みづぐきの跡の徳なればなり。いに
しへ今の諸風土のかたを書いて、
始祖の末座に守護を加へ、且は
季吟ものせてひとりのみながめんよ
りは、一冊子となしてとがぎの見も
のとなさば、塵にまじはるゝ鼻祖
の世にまじ／＼ける煮蕪ありて、いよ
／＼此道のはびこらむ小き桶ならんか。
もしや益ありなば、恐さるもおそるゝ

ならんか。予に此催しの主せよと
あるまゝに、たゞ三三子がことのはに
したがひて語しぬぞおこがまし。こゝを
ゆるしたまはる後の人は、予がさち
なりき。ある人予にいえり、名家の
恐はいかにとこと／＼しう問。予がいえり、
みづべし旨趣こと／＼く恐たり。物
本末あり、草卑長短あり、本を
慕ふて、末の人その本の道を断り。
人はよろづの霊とおなじければ、
いやしきもよきもながきもともに
一なり。なんぞたうときのみ断んや。
ながきのみ断んや。亦、猿が烏帽子は
俗例なりと、おつ／＼答へぬ。彼人
心はなきてぞさりぬ。なぞかは範俊が
雲も義範が風の吹きはらはんなどは、
宏才士の是非をさだめんことを希
望ふ。この集やいきほひある玉
声をこと／＼して成るもの
から、ひもかゞみ九十四人集とは題しぬ。

枕蛙窟運水

〔印〕 〔印〕

- 座次ハ畫像ノ前後二任
- 肖像ハ諸風士ノ心匠二応
- 画工ハ諸風士ノ飯伏二隨

○座次ハ畫像ノ前後二任
○肖像ハ諸風士ノ心匠二応
○画工ハ諸風士ノ飯伏二隨



勢ひあり垂水きえては滝津魚 芭蕉翁

花のまゝ
ふしの
よせ河

梁父



ゆく春や花のながるゝよし野河 梁父

月乃形ふたりの
なみ

少樗

用のなき詩歌の友やとしの暮 少樗



関守の咎めて笑ふ水鶏哉 花醉



花醉

雪こさ

何ふらぬ空にしてをく霜夜かな 貫雪



静止



自笑

仰向て深さはかるや銀河 自笑

短夜や待鳥あるに啼鳥 柳止

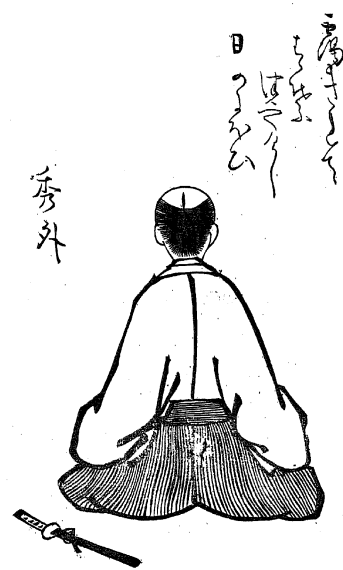
世にすれて心もまろき頭巾哉 米守



子規啼夜蒼木のかほりけり 花好



濡されて青葉つやけし日のにほひ 秀外



牽牛花や起よくのおしへ草 楚鶏



若草や駒の吹ゆく土煙 里暗



喧く蛙鳴なる門田哉 露曉



可都路



蝸やかまどくのゆふけぶり 可都路

元旦や目にあたるもの皆清し 野遊



哥 走

うち揃ひ何やらうれし明の春 歌筵



人
所
經

महाराज

府州

雲
曙



麻刈やともに直なる人ごゝろ 雲晴

數人

6. July 1894

久
詠
梅
仙



藪入や古郷の空の夕詠 梅仙

月三十一日
丁卯年十二月

懷古



月さしてゆかしや雁のわたる声 俵古

爲仁

たどり行道の細さよ遠砧 為仙



南鼓



炭うりや顔までくろき男ぶり 南鼓

然
然
然

涅槃像

弓古



悠然と睡がごとし涅槃像 弓古

茶のなま
わ
は
茶

五峰



茶の友によきもの得たり洪団扇 五峰

楚石



折くは桑の声ありはるの山 楚石

おくき
塵乃聲
うさ
くし

おつこる月と
くさや春の雨

花眠



ねぶたがる目にもくすりや春の雨 花眠

如氷



そこはかたなくものさびし神無月 如氷

おとしこや
うきうき
おき
月

天の
のう
おき
うき
うき

路閑



天の戸のひらくこちやはつ日の出 路閑

五月雨水乞鳥の声もうし 歌楽

歌楽



五月雨
水乞鳥
声もうし

山水のをと忍はするこほりかな 柿園

柿園



かき
こき
山
うき

砂
うき
うき
うき

桂里



松風にまかせて寝るや鳴子曳 鬼久

鬼久

ねん
は
うき
うき

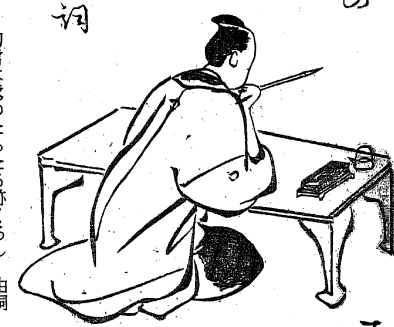


石となるためしは聞ず猫の恋 吐雲



吐雲

初雪は驚のたちたる跡くろし 由詞



由詞

初雪は驚のたちたる跡くろし 由詞

一藍



耳に瀬をたつる雨夜の蛙哉 一藍

限あるこそ恨なれ花七日 花雪



花雪

限あるこそ恨なれ花七日 花雪

草かれて月のやどれる露もなし 巢鷺



巢鷺

草かれて月のやどれる露もなし 巢鷺

雨の夜も晴たころやほとぎす 梅條



梅條

雨の夜も晴たころやほとぎす 梅條

飾ては都も松の山家かな 笑草



笑草

飾ては都も松の山家かな 笑草

世の風になびきも安き若葉哉 繁里

繁里

あき
はる
も
せの
風
になびき
も
あき
も



閑里

芳野川きえずながるやはなの雪 閑里

芳野川
きえず
ながる
やはな
の雪



落し角涅槃の鐘のひびきけり 春水

春水

落し角涅槃の鐘のひびきけり 春水



松露

名月や芋を玉じやと飢ぶ 松露

名月
や
芋を
玉じや
と飢ぶ



炭焼や花にも人の来ぬところ 花岸

花岸

炭焼
や
花にも
人の
来ぬ
ところ



可候

花の野や歩ともなし八百里 可候

花の野
や
歩とも
なし
八百里



玉泉

滝つせをとつもちりて氷哉 玉泉

滝つせ
をとつ
もちり
て氷哉



梅枝

瞿麦や相生松の右ひだり 梅枝

瞿麦
や
相生松
の右ひ
だり







白雨や月は濡れずにひがし山 栄水

栄水

白雨や月は濡れずにひがし山



火を消しにのぼる虫あり高灯籠 次長

火を消しにのぼる虫あり高灯籠 次長



かき
月を
まを
香う
如

十歩



真白う身をかくしたる蜚かな 十歩

板れ簾
うひおや
麻の
聲

東曉



板の簾あむ夜や鹿の声 東曉

ふらの
よそ
時
号

平姿



飛石のどふも踏れぬ暑かな 平姿

はせ
上
う
新舟
小

愛山



此世では上手にうかむ鵜舟哉 愛山

鳴やめば音あり川やぎやうくし 春雅

鳴やめば音あり川やぎやうくし 春雅



春雅

澄々秋の最中や月ひと夜 五雲

五雲



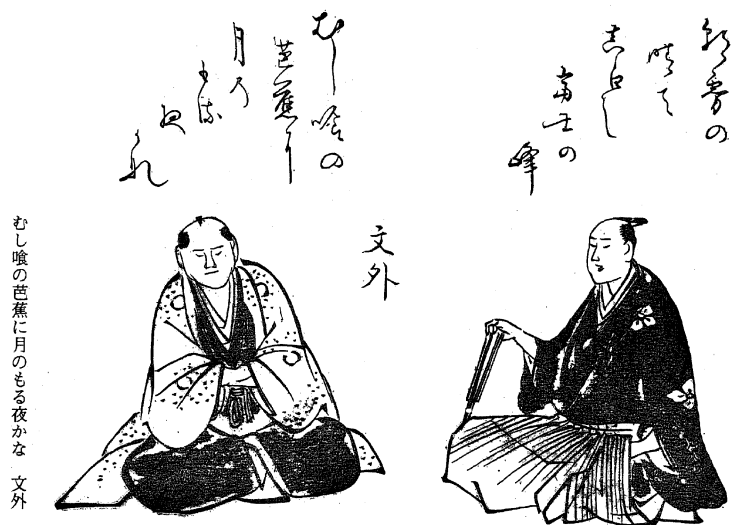
鑑る秋の最中や月ひと夜 五雲



菊の香や聖宿乞ふ歌一首 方也



水波て山吹に春をとめけり 敬之



朝霧の暗て真白し富士の峰 洋水



曙や日和定てなく雲雀 三好

雨の柳筆とともに散にけり 橘台



橘台

梅さくや噺して居る不尽の雪 栢里



栢里

とし玉のしの松葉を作略哉 士水



士水

海棠や目をば隔ぬ翠簾屏風 夏雪



夏雪

のとかさは心にものゝなき日哉 運水



運水

愛さるゝしら菊に似よ我白髪 平橋庵敵水



平橋庵敵水

梅丈



雀まで千代とうたふや君が春 梅丈

印記 跋

なまよみの甲斐の国、都留の郡なるしら滝に残れる祖翁の高詠こそは、遠き境の人のしら滝にして、其ひゞきも髣髴なり。しかるをこたび運水のぬし、祖翁の旅すがた又その流を拖るの徒を画上に告て、終にさくら木にのぼせ不朽に伝ふ。是を聞すれば、世になき始祖にもあひまみえ、今の諸風土にも面談をあひしえみ、座ながらに絶景をながめ、臥ながらに佳声を感じ待れば、浦嶋が子の玉手箱とはことにして、あけてめでたきものなれば、此道の益なきにしもあらず。はた雲の上人も數嶋の道にこゝろを降き、骨をいたましむ。しづ山しづたもめで給ふの少からねば、斯百練千鍛のちからを爰にしも尽せるの輩、祖翁泉下にしるしめさば善き哉とおぼすべし、悪かりしとは思ひ給ふまじ。巻頭には祖翁を痛め、巻尾には敵水を誦じ、その余は白滝のほとりなる郷を限りて、朝な夕なにあらそはぬ友どちをのみつどひて、他郡他土をまじへず、一興に備ふの一篇とは、むべにおもしろく、旨趣をせうそして聞ゆるまゝに、あしでの筆を染るなりし。

文化六巳年仲秋

東都 知苦齋 志塚

印記